Lady Bertram と Fanny Price
――*Mansfield Park* における服従する女と反抗するヒロイン――

高　木　麻由美

Jane Austen（1775－1817）が主要な作品の執筆活動を行った 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、産業革命最中のイギリスでは、フランス革命とそれに伴う急進主義運動の余波が押し寄せ、保守主義的な思想と急進主義的な思想、伝統的な社会秩序の維持と個人の権利の主張といった、二項対立的な価値観が交錯していた。また、個々の人間の権利だけでなく、個人としての女性の権利にも目が向けられた時代でもあった。男性に従属する女性を育てることを推奨した Jean-Jacques Rousseau の *Emile*（1762）の影響もあり、イギリスでは 1760 年から 1820 年の間におよそ百冊もの女子教育に関する書が出版されるなど（Todd xix）、女子教育への関心が強まる中で、Mary Wollstonecraft は著書 *A Vindication of the Rights of Woman*（1792）（以後 *Vindication* とする）において、Rousseau や彼に追随するコンダクト・ブックの著者たちによる女子教育理論を批判し、女性にも男性と同等の教育を受ける権利があると熱心に説いた。この時代の女性観を理解するのに、Johnson 博士と Philip Chesterfield の有名な言葉が役に立つ。前者は、女性の純潔は財産の継承を左右するがゆえに重要だと述べ（Boswell 168）、後者は、女性は「無駄口と機知は持っているものの、理性と良識（“solid reasoning, good sense”）を欠いた」「成長しすぎた子供（“children of a larger growth”）」だと息子に教えた（Chesterfield 1209）。それに対し、Wollstonecraft は上流階級に属する女性の大半が「成長しすぎた子供（“the overgrown child”）」（Wollstonecraft 34）であることを認めた上で、そのような女性を創り出した誤った女子教育や男性優位の社会構造そのものを批判した。

Austen の代表的な六作品の中で、*Mansfield Park*（以後 *MP*）は最も特異な作品とみなされてきた。その特異性はおもにヒロイン Fanny Price に起因する。「誰も Fanny には恋をしない」（Tanner 143）と言われるほど、地味で道徳意識の強い Fanny は魅力に欠け、Austen の母親でさえ彼女を “insipid”（Austen, *Later Manuscripts* 231）だとみなした。とくに、前作 *Pride and Prejudice*（以後 *PP*）の精彩を放つヒロイン Elizabeth Bennet とのギャップは多くの読者に、Kingsley Amis の言葉を借りれば「Austen に何が起きたのか？」と言わせただろう。実際、「多くの読者が Austen に何か異変が起きたのだと考え、その原因を探ろうとした」（Johnson, Introduction xii）。その多くが時代の風潮に原因を見出し、Austen が福音主義に改心したという見方をするなど、特異なヒロイン像の中に Austen の保守主義的な思想への傾向を読み取ろうとした。主として、*MP* を保守主義擁護の小説だととらえる研究者は、Fanny を Christian heroine だとみなしてきた[1)]。これらの批評は、Mansfield Park を＜静＞、すなわち保守的な価値観、ロンドンを＜動＞ととらえ、前者が象徴するものは Fanny、Sir Thomas、Edmund Bertram の人物像に集約され、後者は Crawford 兄妹に集約されているとし、両者の対立が前者の勝利で終わっている点に、Austen の保守主義的思想が反映されているととらえる点でほぼ一致している[2)]。

なかでも Warren Roberts は、前作 *PP* の Elizabeth の言動は *Vindication* における Wollstonecraft

の見解と一致しているが、次作のヒロイン Fanny は保守主義作家 Hannah More の理想の女性像を体現する Christian heroine として描かれていることから、Austen は *PP* まではフェミニストの視点から作品を執筆していたが、*MP* を機に保守主義へと立場を変えたとし、19 世紀までに Wollstonecraft への批判が高まったことが[3] Austen の心境に変化をもたらしたのだとする（Roberts 180-5）。しかし、*MP* 以前に書かれた三作品も、書き直し期間などを含めると 19 世紀初頭に書かれていることを思えば、Roberts の論拠は現実味を欠く。

一方で、Austen が保守主義者であるという見方を否定する試みもなされてきた。Margaret Kirkham はその第一人者である。彼女も Roberts 同様、Austen の作品を Wollstonecraft の *Vindication* に照らして論じているのだが、彼女によれば *MP* は保守主義小説であるどころか、Austen の作品の中で「最も野心に満ちた」（Kirkham xvi）作品である。そして、「臆病で、表面上は従順で、物腰の柔らかい Fanny Price は、Emile の Sophie のイングランド中部版」（102）のように描かれているが、実際は分別と理解力を備えた内面的に成熟した女性であるという点に、“rational feminist”（Kirkham xiii）としての Austen の意図を見出す。このように、Fanny 像の捉え方に応じて作品の批評傾向も大きく変容してきたのである[4]。

Roberts は、Austen が姉 Cassandra 宛に書いた 1801 年 5 月 21 日の手紙の中に、William Godwin に対する「明らかに否定的な言及」があることを Austen が保守主義だとする理由の一つにしている。ここで Roberts が言っているのは、Austen が知り合いの男性について説明した次の言葉であると思われる――“*He* is as raffish in his appearance as I would wish every Disciple of Godwin to be”（Austen, *Letters* 133）。彼はこの記述をもとに、Austen が Wollstonecraft に言及した記録は残っていないが、彼女は間違いなく Wollstonecraft を非難していたはずだと断定する（Roberts 156）。当時、フェミニズムと急進主義的思想が結びつけて考えられていたことは事実であるが、この見解はやや強引である。たとえば、1809 年 1 月 30 日の手紙で、Austen は Hannah More の小説 *Coelebs*（1809）の題名を *Caleb* だと勘違いしていたことについて、「その本に関する真実が分かったとしても、その本が良くなるわけでもないし、その［本の］唯一の長所は Caleb という誠実で実直な名前にあったのに、Coelebs では、衒学的でわざとらしい感じがある」（Austen, *Letters* 259）と、明らかに More の小説を批判するコメントをしている。More は、Wollstonecraft の “*Rights of Woman*” という題名は「奇想天外でばかげている」ので絶対に読まない（More 371）と断言した人物であるし、Caleb とは、Godwin の急進主義的小説の題名 *Caleb Williams*（1794）と同名である。Godwin 信奉者の外見の揶揄を Wollstonecraft 批判とみなすことが可能なのであれば、この Austen の More 批判を、Godwin 支持、すなわち Wollstonecraft への賛同と読み取ることもまた可能であろう。このように、残された文書から Austen の政治的姿勢を読み取ることは困難であり、彼女の作品にも同じことがいえる。しかし、当時の女子教育理論やコンダクト・ブックに対して、彼女が一貫して批判的な姿勢をとっていたことは作品から十分読み取ることができる。

MP が保守主義小説だとみなされた要因の一つに、作中劇として August von Kotzebue（1761-1819）の *Lovers' Vows*（1791 年出版。原題は *Das Kind der Liebe*。Elizabeth Inchbald によって 1798 年に翻案・英訳）が組み込まれたことがある。彼の作品は、理性よりも感情、上流階級よりも下層階級の道徳観を優位に描いていることで、保守主義者の非難の的となった。Austen がこの作品を批判的に扱っていることや、*MP* が准男爵の邸宅における秩序の回復によって閉じられていることは、Austen を保守主義作家だとみなす大きな要因となった。しかし、当時 Kotzebue は Rousseau 信奉

者だとみなされており、Austen が高く評価した Maria Edgeworth の *Belinda*（1801）[5] の中でも、Rousseau の女子教育理論が否定的に描かれ、Kotzebue の名が Rousseau 信奉者である作中人物 Vincent に対する批判の材料として取り上げられていること（Edgeworth 426）を思えば、Austen が *MP* に Kotzebue の作品を組み込んだことは示唆的である。たとえ Austen の思想が保守主義に傾倒していたとしても、女子教育理論からの Rousseau 排除という点において――あるいはその点に限って――Austen が Wollstonecraft の主張に共鳴していたことは大いに考えられる。

以上の点から、本稿では、*MP* のヒロインの特異性に作家の心変わりを見出すよりも、Kirkham 同様、*MP* においても作家の態度は一定していたという考えに同調する方向で論を進めたい。しかし、Kirkham の論点は非常に鋭く示唆に富むものの、前述の批評家たちと同様、< Fanny、Edmund、Sir Thomas >対< Crawford 兄妹>という対立図式をもとに論じており、この点には疑問を感じる。*MP* に Wollstonecraft の思想を見出すのであれば、<女性>対<男性>という、より包括的な視点で作品を検証する必要があるように思える。また、Mansfield Park で Fanny に距離的に最も近い人物である Lady Bertram についてはこれまで詳しく論じられることはなかった。Lady Bertram は面白味のないヒロインの代わりに作品に笑いを提供してくれる喜劇的存在のようにみなされてきたが、彼女の人物像は正しく理解されているのだろうか。Wollstonecraft は前述の著で、女子教育における母親と娘の関係の重要性について繰り返し述べており、とくに上流階級の愚かな母親が娘が成長する上で「愚かさの見本（“an example of folly”）」、または「悪徳（“vice”）」の見本（Wollstonecraft 53）になっていることを懸念している。*MP* でも、結婚前の女性の “impropriety”（Austen, *MP* 46）は、母親や代理母に責任があるとはっきり述べられている個所が見出せる[6]。つまり、*MP* に Wollstonecraft の女子教育論の影響を読み取る際に、Bertram 姉妹の母親であり Fanny の事実上の代理母でもある Lady Bertram の存在は無視できないと思われる。本稿では、これまで詳しく論じられることのなかった Lady Bertram の存在意義にも焦点を当て、男性登場人物たちの Fanny への視線を通じて彼女の実像に迫ることで、*MP* には全編を通じて “rational feminist” としての Austen の思想が色濃く反映されていることを明らかにしていきたい。

Austen の母親の従妹である Cooke 夫人は、*MP* の出来栄えに大変満足したようであるが、ただ一点、“a good Matronly Character”（Austen, *LM* 231）の欠如が気がかりだったようである。*MP* に限らず、Austen の小説では愚かな母親の存在は決して珍しいものではない。しかし、Lady Bertram ほど時代のイデオロギーを反映している母親は Austen の作品中見当たらないだろう。Lady Bertram の評価は多くの批評において一致している。彼女は「愚か」で「知性が欠如している」が、「愛される」人物（Trilling 199-200）であり、「意志力」や「自己判断能力」を完全に欠いているけれども、“an immensely amusing character”（Tanner 152）だとみなされてきた。反対に Fanny は、Lady Bertram には欠如しているこれらの特質を備えていることで、読者の反感を買ってしまったようである。しかし、Lady Bertram の存在は、不人気なヒロインの代わりに作品に光を与える単なる装飾ではない。彼女は、18 世紀イギリスの女子教育論に多大な影響を与えた Rousseau や男性著述家たちが理想とする女性像、すなわち Sophie の似姿なのである。Wollstonecraft は *Vindication* において、とくに女性の容姿への執着、男性への依存、子育てへの無関心を問題にしているが、結婚という、人生の唯一の目的を果たした Lady Bertram もまた、自身の安楽と容姿以外には全く無関心な女性になってしまっている。Wollstonecraft は Rousseau の女子教育理論を非難し、“Rousseau’

s system”（Wollstonecraft 53）に従って育てられた女性が母となった姿を思い浮かべてこう述べる。

> But supposing, no very improbable conjecture, that a being only taught to please [men] must still find her happiness in pleasing;——what an example of folly, not to say vice, will she be to her innocent daughters! The mother will be lost in the coquette, and, instead of making friends of her daughters, view them with eyes askance, for they are rivals——rivals more cruel than any other, because they invite a comparison, and drive her from the throne of beauty, who has never thought of a seat on the bench of reason.（53）

> [B]ut how does she fulfill her duties? Duties!——in truth she has enough to think of to adorn her body and nurse a weak constitution…not to doubt is her point of perfection.（53-54）

ここで語られる女性像は、語り手による Lady Bertram の人物描写と呼応する。

> To the education of her daughters, Lady Bertram paid not the smallest attention… She was a woman who spent her days in sitting nicely dressed on a sofa, doing some long piece of needle-work, of little use and beauty, thinking more of her pug than her children,….（Austen, *MP* 16）

> Lady Bertram did not go into public with her daughters. She was too indolent even to accept a mother’s gratification in witnessing their success and enjoyment at the expense of any personal trouble….（26）

2 巻 11 章で、Julia Bertram が姉 Maria のロンドン行きに同行したいと願い出たとき、Lady Bertram は持ち前の “good nature”（194）ゆえに反対はしないが、Julia の帰りが延期になったことを大いに嘆く。

> A great deal of <u>good sense</u> followed on Sir Thomas’s side, tending to reconcile his wife to the arrangement. Every thing that a considerate parent *ought* to feel was advanced for her use; and every thing that an affectionate mother *must* feel in promoting her children’s enjoyment, was attributed to <u>her nature</u>.（194-5 下線筆者）

この passage からは一見、愚鈍な妻と妻をなだめようと苦労する Sir Thomas の喜劇的な情景が思い浮かぶが、“ought” と “must” があえてイタリックになっていることからも分かるように、その深層にはオースティン特有の辛辣なアイロニーがある。この夫婦の力関係は、*Emile* の Emile と Sophie を想起させる。Rousseau は理想の夫婦関係についてこう述べる——

> O what lovable ignorance! Happy is he who is destined to instruct her. She will be not her husband's teacher but his pupil. Far from wanting to subject him to her tastes, she will adopt his…he will have the pleasure of teaching her everything. (Rousseau 410)

ここでは、Sir Thomas の "good sense" と Lady Bertram の "good nature" が対峙していることに注目したい。中年期にさしかかった妻に理想の母親像を教えなければならない Sir Thomas と、彼に忠実な Lady Bertram を通じて、Austen は教師―生徒という理想の夫婦関係をアイロニカルに描き出している。Rousseau は幼少時から女性に束縛を教え込むことの重要性を説き、その理由をこう述べる。

> From this habitual constraint comes a docility which women need all their lives, since they never cease to be subjected either to a man or to the judgments of men and they are never permitted to put themselves above these judgments. The first and most important quality of a woman is gentleness. As she is made to obey a being who is so imperfect, often so full of vices, and always so full of defects as man, she ought to learn early to endure even injustice and to bear a husband's wrongs without complaining. It is not for his sake, it is for her own, that she ought to be gentle. (Rousseau 370 下線筆者)

夫がもし不道徳で欠陥だらけの不完全な人間であっても、妻は夫に生涯従わねばならないのだから、女性が幼少時から束縛によって服従心を身に着けるのは自らの保身のためなのだというのである。Wollstonecraft は、Rousseau や男性著述家たちが「女性の理性を否定している」(Wollstonecraft 204) ことに反駁したが、数々のヒロインに理性を付与した Austen にとっても、この Rousseau の女性観は無視できないものであっただろう。幼少時からの束縛は、まさに Sir Thomas が Bertram 姉妹たちに実践し失敗に終わった方法である。彼女たちが自分たちの母親を自身の理想の未来像だと思わなかったことは明らかで、彼女たちの中に芽生えた "matrophobia"――「自分の母親のようになることへの恐怖」(Gilbert and Gubar 125-6) ――が、従順な女性像への反発や駆け落ちにつながったことは十分推測できる。「Austen の小説に登場する娘たちは事実上あるいは比喩的に母親不在の状況にあるため、男性の庇護を探し求めなければならないと容易に信じ込んでしまう」(125) ので、彼女たちが家庭から逃れるには、別の家庭を求めるしか方法はないのである。

John Sutherland は、Lady Bertram の愛犬パグの性別が物語の途中で入れ替わっていることを指摘したエッセイで、パグにまつわるエピソードは、「実質的には小説の読み方を変えはしないが、一人の主要人物の輪郭をいっそう鋭く浮かび上がらせる」(Sutherland 277) と述べる。この人物とは Lady Bertram のことで、Sutherland は、ブルドッグとは違って「全く役に立たない」(279) パグと Lady Bertram とを重ね合わせ、パグの存在は Lady Bertram の愚かさを強調するのに役立っているとする。彼の言うように、パグの存在は小説の読み方を大きく変えはしないかもしれないが、「不格好 ("ugly")」だが「流行の装飾物 ("cherished fashion accessories")」で、「装飾物としてとくに有用 ("peculiarly useful as women's accoutrements")」だが「全く役に立たない ("entirely useless")」

「従順な犬（“docile dogs”）」――もっといえば、Lady Bertram に代表される当時の女性――が孕む矛盾は、時代の社会的、文化的コンテクストを鑑みると、一個人の愚かさを浮き彫りにする以上の意味をもっているように思える。パグは、「1794 年に流行し、最も由緒ある愛玩犬（“toy dogs”）の一種で・・・もともと『男性的な』動物（“‘masculine’ beasts”）――マスティフ犬――であったが、女性の装飾用に遺伝学的に作りかえられた」(280-1)。商業用のため人工的に「女性的」要素を帯びさせられたパグのイメージは、marriage market のために教育を受ける女性のイメージと重なり合う。この点からみれば、パグが雄であろうが雌であろうが、その示唆するところは Austen にとってほぼ同じだったと思える。

Wollstonecraft は、人間と獣の相違点は理性の有無にあるとし、その重要性を強調する――“In what does man’s[human’s] pre-eminence over the brute creation consists?” “…in Reason” (Wollstonecraft 14)。彼女はこう述べることで、男性が女性に理性を認めないことは、女性を「獣（“the brute creation”）」と同列にみなすことだと主張する。さらに、この次の章では、「女性が男性のために造られた」という創世記に端を発する通念を利用した男性たちによって、「女性は獣と同じように男性を喜ばすために創造された」(Wollstonecraft 27) [7] という考えが受け継がれてきたことを批判している。実際、女性の価値は男性を喜ばせることだという考えは当時の共有観念の一つであり、「Rousseau や彼を見習った大抵の男性著述家たちは、女子教育の趣旨はひたすら一つの点――男性を喜ばせる女になること――に向けられるべきである、と熱心に説いてきた」(58) のである [8]。女性を「獣」にたとえるのならば、それは「去勢されたマスティフ犬」、つまりパグのような愛玩動物ということになるだろう。Wollstonecraft は著書の中で、男性に依存する女性をスパニエル犬と結びつけて表現しているのだが [9]、Sir Thomas に依存し、怠惰に身をゆだね、子供たちのことよりも自身の美貌に関心を持つ Lady Bertram は、Wollstonecraft の言葉を借りれば「スパニエル犬のようにしっぽを振ってへつらう女性」(88) である。Lady Bertram の美貌と従順さは、marriage market における彼女の価値を高めただろうし、持参金の不足というマイナス要素を差し引いても、Sir Thomas を大いに喜ばせたに違いない。

Austen は、*Northanger Abbey*（以後 *NA*）ではヒロイン Catherine Morland を「美人が生まれながらに愚かであることの利点」(Austen, *NA* 112) を享受する人物として描きつつ、自らの声でその利点を直接的に批判している――“to the larger and more trifling part of the sex, imbecility in females is a great enhancement of their personal charms…a good-looking girl, with an affectionate heart and a very ignorant mind, cannot fail of attracting a clever young man” (112)。しかし *MP* では、この問題について語り手が自ら語ることは避け、代わりに、*NA* の愚かなヒロイン像の影を Lady Bertram に背負わせ、彼女を通じて「女性の無知の奨励」という男性中心的な価値観をより巧妙なかたちで間接的に批判している。語り手の態度は *NA* の時よりも冷静である分冷ややかである。そして、この「利点」は、Wollstonecraft の筆になると直截的な社会批判に変わる。

> Women are told from their infancy, and taught by the example of their mothers, that a little knowledge of human weakness, justly termed cunning, softness of temper, *outward* obedience, and a scrupulous attention to a puerile kind of propriety, will obtain for them the protection of man; and should they be beautiful, every thing else is needless, for, at least, twenty years of their lives.（Wollstonecraft 22）

そして Austen も、そういった女性の魅力が永続的に男性の欲望に訴えかけることが不可能であることを、少なくとも *MP* 執筆時には承知していたはずである。このような女性にどういった未来が待っているのかは、次のエピソードを通じて示されている。

Fanny を Henry Crawford と結婚させるために、Thomas はしばらくの間 Fanny をポーツマスに行かせようと計画するが、この計画の最大の難題は Fanny がいなければ何もできない Lady Bertram を説得することである。Sir Thomas は再び彼女の教師となって、Lady Bertram を説得しようとする。

> [H]e did induce his wife to let her go; obtaining it rather from submission, however, than conviction, for Lady Bertram was convinced of very little more than that Sir Thomas thought Fanny ought to go, and therefore that she must. In the calmness of her own dressing-room, in the impartial flow of her own meditations, unbiased by his bewildering statements, she could not acknowledge any necessity for Fanny's ever going near a Father and Mother who had done without her so long…. (Austen, *MP* 251 下線筆者)

ここで読者は、Lady Bertram に思考能力があることに気づかされる。彼女が夫に反論しないのは、夫に服従して喜ばせることをごく自然のことだと考えているためであり、また、おそらくこれまで自分で物事を判断し決定するように教育されてこなかったためであろう。さらに、男性とは違い自分自身の書斎を持たない女性にとって、思考を許される唯一の場所が "dressing-room" であることは注目に値する。居候の Fanny でさえ自分自身の部屋があるにもかかわらず、既婚女性のプライベートな空間は dressing-room しかないのである。つまり、彼女は身体的にも知能的にも "master at Mansfield Park" (251) によって制限を受けていることになる。語り手は、Sir Thomas が妻の「分別、判断力、威厳」(251) に訴えて了解を得たと述べることで、彼がいずれの特質も彼女に認めていないことを逆説的に示している。Rousseau が、「夫がもし不道徳で欠陥だらけの不完全な人間であっても、妻は自分の保身のために夫に生涯従わねばならない」(Rousseau 370) と言ったように、また、Wollstonecraft が、"Rousseau's system" に従って育った女性にとって「完璧な女性になるためには疑わないことが重要である」(Wollstonecraft 54) と述べたように、あるいは、*NA* の Catherine が Henry Tilney と意見が食い違う場面で、「Henry の判断を疑うよりも自分の判断を疑うほうが簡単なので、彼の判断を正しいと認めざるをえなかった」(Austen, *NA* 217) ように、Lady Bertram が抱える葛藤は、夫の "good sense" に "submission" することでしか解決されないのである。E. M. Forster は、Lady Bertram を「平面的人物 ("a flat character") だが、物語の展開に応じて立体的人物 ("a round character") にふくらむことができる」人物だと評したが (Forster 123)、まさにこの場面は、彼女の人物像に深い陰影を与える数少ない描写の一つだといえるだろう。

話は少し戻るが、2 巻 7 章のグラント家での晩餐で、どのゲームに参加すべきか自分では決められない Lady Bertram が、Sir Thomas の意見を仰ぐ場面がある——"What shall I do, Sir Thomas? ——Whist and Speculation; which will amuse me most?" (Austen, *MP* 164 下線筆者)。Sir Thomas は彼女に "Speculation" を勧めるのだが、語り手はその理由をこう説明する——"[h]e was a Whist player himself, and perhaps might feel that it would not much amuse him to have her for a

partner”（164 下線筆者）。この言葉から、Sir Thomas の判断は “good sense” ではなく、自己本位な意志に基づいていることが分かる。彼は妻にゲームのやり方を教える役割を Henry に押しつけ、自分はゲームに興じる。彼にとって、中年期にさしかかった妻はもはや amusement そのものではなく、自らの amusement や arrangement の障害にならないよう説き伏せるべき年老いた生徒にすぎない。しかし、幸運なことに一晩かけてもゲームのルールが覚えられない Lady Bertram は、夫の意図に気づくことなく、「彼の判断」よりも、「彼の判断に従うこと」に満足するのである。このような中年夫婦の構図、すなわち Rousseau の提言に従って妻を選んだ男性とその妻の末路は *PP* においても Bennet 夫妻を通じて描かれている――“Her father[Mr. Bennet], captivated by youth and beauty… had married a woman whose weak understanding and illiberal mind, had very early in their marriage put an end to all real affection for her…. To his wife he was very little otherwise indebted, than as her ignorance and folly had contributed to his amusement”（Austen, *PP* 262）。

美貌と服従心を備えた紋切り型の女性像は、多く男性作家によって悲劇的に描かれてきたが、Austen はあえてその女性像を喜劇的に描くことで、女性が背負わされた時代のイデオロギーの影の部分をリアルに写し出している。彼女は皮肉を込めて Lady Bertram を描いたが、彼女の意図は単に男性に完全に依存する女性を攻撃することではなかっただろう。実際 Lady Bertram はこの時代の女性の幸福（と思われるもの）全てを手にしているし、物語の最後まで安楽のソファから引きずり下ろされることはない。Austen の意図は、Wollstonecraft と同様、誤った教育を受けた女性ではなく、そのような女性を生み出した社会的、文化的背景そのものを攻撃することにあったのではないかと思う。われわれが Lady Bertram に好感を持ち続けるのは、彼女の愚かさの端々に、語り手による憐みが感じられるからではないだろうか。

次に、Lady Bertram と対比させながら、三人の男性登場人物たち――Sir Thomas, Henry, Edmund――とのかかわりを通じて Fanny 像に迫っていきたい。

物語の冒頭から、Fanny の人物造形に込められた Austen の意図は明らかである。Wollstonecraft は *Vindication* において教育とたしなみごと（accomplishments）を繰り返し区別しているのだが[10]、この差異は、*MP* の冒頭部分における Fanny と Bertram 姉妹が受ける教育の差異に通じるものである。Mansfield Park に来た時、Fanny は「読み書きと針仕事はできたが、その他の教育は受けていなかった」ため、Bertram 姉妹は彼女を「恐ろしいほどのばか」だとみなし（Austen, *MP* 15）、さらに、Fanny が音楽も絵画を学ぶ気がないことは、彼女たちの目には「非常に奇妙でばかげている（“so odd and so stupid”）」（16）と映る。このエピソードにおける作者の意図は、Wollstonecraft の以下の言葉を借りて説明することができる――“Novels, music, poetry, and gallantry, all tend to make women the creatures of sensation, and their character is thus formed in the mould of folly during the time they are acquiring accomplishments, the only improvement they are excited, by their station in society, to acquire”（Wollstonecraft 66）[11]。

Fanny が「誤った教育を受けなかったことによる成果」は、物語の後半を通じて描かれている。Sir Thomas は、Fanny に Henry との結婚の意志がないと知ると、それまで彼女に対して抱いていた、「理解力（“understanding”）」（Austen, *MP* 212）の備わった “a well-judging young woman”（213）という評価を簡単に覆す――“you have disappointed every expectation I had formed, and prove

yourself of a character the very reverse of what I had supposed”（216）。女性に分別や理解力を認めるとき、明らかに彼はそれらの用語の定義を男女別に意識的に区別している。Fanny が Henry を拒んだのは彼女自身の理解力を働かせた結果なのだが、Sir Thomas は彼女が自分の意見に従わないという理由で、彼女の理解力を否定する。彼が Fanny を理解できないと言えばいうほど――“I do not catch your meaning”、“This is very strange!”、“This is beyond me”（214）――また、彼が Fanny の理解力を否定すればするほど、彼自身の理解力の欠如が露わになり、Fanny の理解力が強調されることになる。

続く Sir Thomas の言葉には、当時のフェミニズム論争に対する憎悪に満ちた反応が読み取れる。

> “I had thought you peculiarly free from willfulness of temper, self-conceit, and every tendency to that independence of spirit, which prevails so much in modern days, even in young women, and which in young women is offensive and disgusting beyond all common offence.”（216）

Fanny の置かれた立場を考えれば、Sir Thomas の見解が彼女の実像からかけ離れているとは言えないだろう。彼は Fanny が考慮しなければならない事情を列挙する。

> “The advantage or disadvantage of your family――of your parents――your brothers and sisters――never seems to have had a moment’s share in your thoughts on this occasion. How they might be benefited, how they must rejoice in such an establishment for you――is nothing to you.”（216）

以前から「Fanny の養育費と将来の義務」（19）から解放されることを願っていた Sir Thomas が、Henry の求婚を拒否する Fanny を自己犠牲の精神に欠けるといって非難するのは無理からぬことであろう。彼にとって、女性の評価――判断力や分別の有無――は、自己犠牲精神や従順さによって決定される。*PP* の Elizabeth が自分の意思で Collins と Darcy の求婚を拒むように、Fanny もまた、周囲の利害を無視して自分の意志で求婚を拒むのだが、自己の意志を貫く強さでは、Fanny は Elizabeth をはるかに凌いでいる。Elizabeth は、「私のことをお上品な女性（“an elegant female”）ではなく理性的な人間（“a rational creature”）だと思ってください」（Austen, *PP* 122）と言って Collins に自分との結婚を諦めるように言うが、それでも彼が引き下がらなければ、父親を通じて断ろうと考える。しかし、Fanny には頼れる人物はない。とくに女性の場合、自己犠牲が道徳行為と結びつけて考えられていたことを思えば、居候という立場、周囲への恩義、実家の窮状、愛する兄の未来などを考えあわせると、Fanny が自己犠牲精神よりも独立心 “independence of spirit” を重視したことは、家父長制に対する重大な反抗であるとみなすことができるだろう。この Fanny の選択は、結果的には Mansfield Park とそれが象徴する伝統的価値観や秩序の存続に寄与するものとなるのだが、この時点での Fanny の決断は、コミュニティの一員としてではなく個人として行われたものであることは疑いない。Roberts は、Austen は保守主義者として “the radical and Revolutionary ideology with its emphasis upon <u>individual rights</u>”（Robets 37 下線筆者）に反対していたと述べるが、少なくとも Austen は、woman’s rights には無関心ではなかったことをここで証明しているこ

とになる。

Marjorie Haselswerdt は、Fanny を *Clarissa* や数多くのヴィクトリア朝小説における "models of Christian self-sacrifice who disregard their own needs and desires in favor of those of someone else"（Haselswerdt 225）の一人に数え上げているが、素人芝居への参加を拒否したときや求婚を拒否したときのように、重要な事柄において Fanny が他者のために自己判断能力を犠牲にすることには一度もない。Sir Thomas に服従することを拒んだ代償として、Fanny はポーツマスに追いやられるが、その対極には常に夫に "submission" することで安楽のソファに横たわる Lady Bertram の存在がある。妻である Lady Bertram でさえ Sir Thomas に反論する術を知らないのに対し、Fanny は彼に抵抗するだけでなく、彼の理解力を正そうと試みるのである——"'You are mistaken, Sir,' ——cried Fanny, forced by the anxiety of the moment even to tell her uncle that he was wrong ——'You are quite mistaken'"（Austen, *MP* 213-4）。

Wollstonecraft は、上流社会の女性の教育を次のように批判する——"in the education of women, the cultivation of the understanding is always subordinate to the acquirement of some corporeal accomplishment"（Wollstonecraft 26）。そして、"understanding" の欠如が招く不幸の一例をこう述べる。"till women are led to exercise their understandings, they should not be satirized for their attachment to rakes; ...when it appears to be the inevitable consequence of their education"（126）[12]。この Wollstonecraft の懸念は、*MP* において如実に再現されている。つまり、誤った教育を受けた Bertram 姉妹は Henry の誘惑に陥るが、理解力を備えた Fanny は Henry の正体を見破り、無事愛する人と結ばれる。しかし、自覚のないフェミニスト[13] である Fanny は、Sir Thomas との上記の討論の後、東の部屋の暖炉に初めて火がついているのを見ると、彼に対する "painful gratitude" に心を揺さぶられ、"I must be <u>a brute</u> indeed, if I can be really ungrateful!"（Austen, *MP* 219 下線筆者）と心の中で叫ぶ。

Fanny にはっきりと Henry と結婚する気がないことを聞かされた後も、Sir Thomas は「人間性に関して彼が持つあらゆる知識（"all his knowledge of human nature"）」（249）をもとに、Fanny の心が Henry に傾くと信じ続ける。彼は Fanny をしばらくポーツマスに帰す計画を提案するが、それは「目下のところ病んでいるとしか思えない姪の理解力に対する一種の治療計画」（250）である。彼の理解力の低さをアイロニーの矛先とするこの表現の深層には、Austen による辛辣なミソジニー批判が読み取れる。彼は自分に従属しない女性にはなんらかの精神的欠陥があるのだと決めつけ、精神的に矯正させるべく、Fanny をポーツマスに隔離する[14]。彼、ひいては当時の男性の多くにとっては、Lady Bertram が健全で理想的な女性の鑑となる。Henry と Maria の駆け落ちという偶発的事件でもなければ、Sir Thomas の意向に従わない限り、Fanny は Mansfield Park に戻れなかったかもしれない。結果的に、Fanny のポーツマスからの解放は、彼女よりも深刻な家父長制への脅威となった Maria が隔離されるという犠牲をともなって叶えられるのである。

次に、Henry とのかかわりを通じて Fanny の実像に迫っていきたい。男性の amusement の対象とみなされるのは、この作品において Lady Bertram だけではない。物語の前半では Bertram 姉妹が Henry の amusement の対象になるし、後半では Fanny がその対象になる。初めて Mansfield を訪れたとき、Henry は Bertram 姉妹との戯れの恋を目当てに滞在を延期するのだが、二度目の Mansfield 訪問では Fanny を目当てに滞在を延期する。彼は Mary に言う——"how do you think I mean to <u>amuse myself</u>, Mary, on the days that I do not hunt? I am grown too old to go out more

than three times a week; but I have a plan for the intermediate days…”（157 下線筆者）。彼の “plan” とは、「Fanny に自分を好きにさせること」（157）である。Henry にとって、恋愛は “hunt” と同様 amusement であり、狩りの獲物と同様、獲得した後の女性にも価値がない。彼もまた、「女性は野獣と同じように男性を喜ばすために創造された」という考えの持ち主である。

Fanny との結婚を決意した Henry は、Mary と共に “the gentleness and gratitude of her disposition” “her patience and forbearance” “the gentleness, modesty, and sweetness of her character” などと彼女の魅力を並び立てるのだが、語り手は皮肉まじりにこう付け加える――“that sweetness which makes so essential a part of every woman’s worth in the judgment of man, that though he sometimes loves where it is not, he can never believe it absent”（200）。さらに次作の *Emma* でも、Austen は Emma に、男性が女性に美しい顔の代わりに深い知性を求めるようになるまでは、女性は “beauty” “good-nature” “sweetness of temper” などを備えていれば男性に愛されるのだと言わせている（Austen, *Emma* 67）。このような女性の特質の重要性が、*Emile* や 18 世紀のコンダクト・ブックの中で繰り返し教えられてきたことを思えば[15]、上記の Austen の言い回しは、当時の理想の女性像に対する彼女の姿勢を伺わせるものである。

語り手は Henry が Fanny に惹かれた理由をさらに続ける――“her having such a steadiness and regularity of conduct, such a high notion of honour, and such an observance of decorum as might warrant any man in the fullest dependence on her faith and integrity” 。そして、Henry 自ら次のように述べて Fanny の魅力を締めくくるのだが――“I could so wholly and absolutely confide in her,…and *that* is what I want”（201）、これらの称賛の言葉が具体的に何を示すのかは、序論にて引用した Johnson 博士の女性の純潔と正統な財産継承に関する言葉が参考になるだろう。Austen は、続けて “Henry Crawford had too much sense not to feel the worth of good principles in a wife”（201）と述べることで、Henry のように “an advocate of individual liberty”（Roberts 36）を気取る男性でさえも、家父長的価値観を重視することを示し、ここでもまた男性の “sense” を揶揄している。こう見れば、Henry が、婚約中の身でありながら彼の誘惑に乗る Maria ではなく、Fanny に求婚するのは当然のことであろう。彼は Fanny を「この世には存在しえない女性」（Austen, *MP* 200）だと表現するが、彼が 1 巻 4 章で「妻を賜ること」を Milton の言葉を借りて “Heaven’s *last* best gift”（32）と言い表していることから、彼が Fanny の中に *Paradise Lost* の従順な Eve や Sophie のイメージを重ね合わせていることは明らかである。

牧師館の晩餐会でゲームをする際、Henry は Lady Bertram 同様 Fanny にも自分の助けが必要だと考え、ルールをつきっきりで教えようとする。しかし、一晩かけてもルールが覚えられない Lady Bertram とは違って、たった 3 分で “mistress of the rules of the game”（164）になれる Fanny と Henry の間に教師―生徒という関係が構築されることはない。Henry は、彼女の “understanding” を “quick and clear”（201）と評価したが、この場合 “understanding” という言葉の意味は文字通りに受け取るべきではない。Henry は、彼女に彼の求婚を拒否するだけの分別や理解力が備わっているとは夢にも思っていないのである。彼は Fanny を称賛する際、Lady Bertram を “stupid woman”（202）と呼び Fanny の引き立て役にみなしているが、皮肉にも Lady Bertram は彼が理想とする女性の未来像なのである。

教師―生徒の関係は、Edmund と Fanny の関係に見出すことができる。Mansfield Park に向かう道中で Fanny に “the extraordinary degree of gratitude and good behavior”（12）を教え込んだ

Norris 夫人を別にすれば、彼女の最初の教師は Edmund である。彼は Fanny に親切な心遣いを示してくれる唯一の人物であり、彼が「彼女の精神を形成してきた」(47) のである。Mary Poovey は、"[f]or her[Fanny], the ultimate reward of propriety would be simply to be loved by the man who has made her what she is"（Poovey 217）と述べるが、もしそうなら、彼らの結婚は Pygmalion complex による結末ということになる。つまり、Fanny が 6 歳の頃から教育を施し、淑女、すなわち "a textbook Proper Lady"（Poovey 217）へと導いた Edmund が、Mary が "no feminine"（Austen, *MP* 308）だと気づいたのちに Fanny を選ぶ、という筋書きである。まるで、*Belinda* で Rousseau 信奉者の Clarence Hervey が Virginia を Sophie のような女性に育て上げて妻にしようと企んだ "the romantic project"（Edgeworth 343）の再現である。しかし、こういった読みは *NA* や *Emma* のヒーローとヒロインになら当てはまる部分もあるだろうが、*MP* の二人に当てはめることはできないだろう。Edmund と Fanny の教師―生徒の関係は物語が始まって間もなく崩れてしまうからである。ストーリーが進むにつれ、彼女は理解力や判断能力において Edmund を越えていく。Edmund は道徳を重んじる常識的な人間だが、他者への理解力や洞察力の点では、Henry Tilney や George Knightley に及ばないのと同様、Fanny にも及ばない。Kirkham は、Edmund は Fanny の弱さを奨励する "the true hero" ではなく、彼女の内面を認識し尊敬する異色のヒーローであり、彼女を "the true conduct-book heroine" とみなす Henry と対峙しているとし、Austen のフェミニストとしての意図はそのような Edmund と Fanny の関係に顕著に表れているとするが（Kirkham 104-8）、むしろ、Austen の意図は、唯一の理解者であるはずの Edmund でさえも Fanny を conduct-book heroine とみなしている点にあるといえる。

Crawford 兄妹の闖入により、初めて Fanny は Edmund ではなく自分自身の理解力を働かせることになる。Mary の評価を巡って、Fanny と Edmund の間に初めて見解の相違が生じる。Edmund に Mary の欠点について聞かれた Fanny は、Mary が自身の伯父のことを悪く言ったことについて "very ungrateful" と言うのだが、Edmund は "Ungrateful is a strong word"（Austen, *MP* 46）と Fanny をたしなめる。しかし、Mansfield Park で彼女を取り巻く環境が、彼女に Mary のような言動を "ungrateful" だと教えてきたことを思えば、彼の Fanny への発言は公平とは言えないだろう。Fanny は、Mansfield Park に来た日から "gratitude" や "gratefulness" を感じるだけでなく、態度で示すよう求められ、素人芝居への出演を拒否した際には Norris 夫人に "ungrateful girl"（103）と罵られ、Henry の求婚を拒否すると Sir Thomas に "ingratitude"（216）と責められ、"Heaven defend me from being ungrateful!"（219）と自らを責める。Edmund は、Fanny には許されないことを Mary には許そうとする。Edmund は、Fanny が彼自身の見解に同調を示していないにもかかわらず、次のように述べて議論を強引に締めくくる――"She[Mary] is perfectly <u>feminine</u>…I am glad you saw it all as I did"。語り手はその理由をこう説明する――"[h]aving formed her mind and gained her affections, he had a good chance of her thinking like him"（47 下線筆者）。1 巻 2 章で "He[Edmund] knew her to be clever, to have a quick apprehension as well as good sense"（18）とあるように、誰よりも早く Fanny に分別と理解力を認めた Edmund でさえ、彼女の考え方が自分とは異なる場合には、そのいずれの特質も彼女に認めることができないのである。つまり、彼が Fanny の中に期待する理解力や分別は、彼女の中に投影された自分自身の影響力や思想でしかないのである。

同様のパターンはこの後も何度か繰り返される。頑なに素人芝居への出演を拒んでいた Edmund

は、Mary のために心が揺らぎ、「助言と意見」(107) を求めて Fanny の部屋を訪れる。意見を求められた Fanny は大喜びするが、この時すでに彼は Anhalt 役を引き受ける決意を固めており、彼が彼女に求めるのは意見ではなく、彼の意見への同調である。彼は、Fanny が賛成でないのを察すると、彼女が自分の意見に従うよう導こうとする――"But what? I see your judgment is not with me. Think it a little over" "Does not it strike you so, Fanny? You hesitate" "Give me your approbation, then, Fanny" (108-9)。さらに注目したいのは、Edmund の判断力に頼れないと気づかされるにつれ、Fanny の自立心と自らの判断力への自信が強くなることである。Edmund が来る直前、Fanny はこれまでに従兄姉たちから受けた恩義を思い起こし、芝居への出演を拒んだことに自信が持てずに悩んでいた。彼女にとって、"Edmund's judgment" (107) が唯一の拠りどころとなっていたのである。しかし、彼との上記の会話の後、Fanny の心情に大きな変化が起こる。

> [T]he doubts and alarms as to her own conduct, which had previously distressed her, …were become of little consequence now…. Things should take their course; she cared not how it ended. Her cousins might attack, but could hardly tease her. She was beyond their reach…." (110)

Edmund が Fanny の人物像をどのように捉えているのかは、次のエピソードに最もよく表れている。彼は Sir Thomas の指示で、Henry の求婚を受けるよう Fanny に勧めるが、彼女に "I am afraid we think too differently" と求婚の話題を拒まれると、こう答える――"Do you suppose that we think differently? I have no idea of it"。ここでも彼は、自分と Fanny の意見が一致していることを前提に話を進めるのだが、二人の間に大きな認識のずれがあることが、続く彼の言葉で明らかになる――"let him[Henry] succeed at last, Fanny, let him succeed at last. …prove yourself <u>grateful</u> and tender-hearted; and then you will be <u>the perfect model of a woman</u>, which I have always believed you born for" (235-6 下線筆者)。これに対し、Fanny が興奮して拒否すると、Edmund は驚いて Fanny の口調を咎める――"Never, Fanny, so very determined and positive! This is not like yourself, your rational self"。Edmund の反応に Fanny は顔を赤らめ、"correcting herself" (236) する。Edmund も Sir Thomas や Henry と同様、Fanny を *Emile* やコンダクト・ブックなどに登場する "the perfect model of a woman" という鋳型にはめこもうとしているのである。Edmund は幼少時から Mansfield Park で Fanny に関心を抱いてくれる唯一の人物であったため、彼女はおそらくこれまでも彼の期待に応じて "correcting herself"、もっと言えば、女性の鑑というペルソナをつけてきたのであろう。*Emma* で、Fanny 同様苦しい立場にある Jane Fairfax が、「いつもお芝居をしていたんです――偽ってばかりの生活でした！」(Austen, *Emma* 501) と、身分違いの男性との結婚を実現するために自らを欺いていたことを告白したが、Fanny もまた、無意識ではあるが自分の居場所を確保するために自らを "conduct-book heroine" の似姿に装わねばならなかった。Sir Thomas が、Henry の求婚を拒否した彼女のことを "ungrateful" だと言い、彼女の理解力を "diseased" (250) とみなしたのと同様に、Edmund もまた、Henry の求婚を受け入れることは "the natural wish of gratitude" (236) だと彼女に助言する [16]。しかし、いくら説明しても聞き入れようとしない Edmund に、Fanny はきっぱりと次のように述べ、女性の権利を主張する [17]。

> "I *should* have thought,…that every woman must have felt the possibility of a man's not being approved, not being loved by some one of her sex, at least, let him be ever so generally agreeable. Let him have all the perfections in the world, I think it ought not to be set down as certain, that a man must be acceptable to every woman he may happen to like himself…we think very differently of the nature of women, if they[Crawford's sisters] can imagine a woman so very soon capable of returning an affection…."（239-240）

この主張はEdmundに何の効果も与えず、彼は話題を変えて彼女の機嫌をとろうとする。

見てきたように、男性登場人物たちの知性や理解力が作中で最も疑われるとき、Fannyの理解力が最も発揮される。語り手は何度も同じような状況を描き出して、Sir ThomasとLady Bertram、EdmundとFannyという二つの構図を読者に気づかせようとする。Sir ThomasがLady Bertramにそうしたように、Edmundも理詰めでFannyを説得しようとするが、彼女はLady Bertramとは違い、男性の意見に"conviction"することも、"submission"することもしないのである。

Lady Bertramは、FannyがHenryに求婚されたと知ると、「これほど申し分のない求婚を受け入れるのは若い女性の義務というもの」と言って過去8年半の間で初めて彼女に「指図と忠告」を与える。Fannyは、「伯母の理解力を攻撃（"attacking her understanding"）しても無駄」（226）だと悟り、黙り込む。この場面はLady BertramとFannyが初めて対立する場面であり、同時に、二人の女性の差異が最も顕著に表れる場面でもある。しかし、"beauty and wealth"（225）にのみ価値を見出すLady Bertramは、この時初めてFanny を自分と同類の女性だと認め、「パグに仔犬が産まれたらあなたにあげるわ」(226) と提案する。パグの仔犬が誰の手に渡ったか読者に知らされることはないが、少なくともFannyがLady Bertramからパグ、すなわちSophieの影を受け継がなかったことは明らかであろう。

*MP*では、ヒーローはAustenの他のどの作品よりも愚かに描かれている。彼は誠実で心優しい若者ではあるが、父Sir Thomasの影を受け継ぐRousseau信奉者であり、*Belinda*のHarveyがVirginiaに試みたように、彼も――全くの善意からではあるが――Fannyを"conduct-book heroine"へと教育しようとする。Fannyも一見、愛する男性によって"Christian heroine"に成長するかのように表象されるが、プロットが進むにつれ、彼女はEdmundよりも理解力と分別の点において優れていることを証明していく。Austenが前作でTilneyやDarcyのような、達観した女性観を持つ新しい男性像を描き出したことを思えば、Austenが*MP*においてあえてそのようなヒーローを描かず、代わりにFannyのような内面的に成熟したヒロインを描いた点に、作家の意識の発展を見ることができる。

Edgeworthは*Belinda*において、あからさまにRousseau信奉者の男性を非難したが、一方でWollstonecraftの擁護者だとみなされることを回避するために、作中にWollstonecraftのカリカチュアであるFreke夫人を登場させた[18]。しかし、アイロニーの名手Austenは、Edgeworthのように名指しでRousseau批判はしなかったし、Wollstonecraftを揶揄するような隠れみのも用いなかった。その代わりに、Austenは物語の最後でMansfield Parkが象徴するイギリスの伝統的価値観や秩序を回復させるなどして――その回復は、実は家父長的な権威によってではなく、一人の女性の

“good sense”[19] によるものなのだが――巧妙に自らの意図を覆い隠すのである。

Fanny は、一個人の女性として権利を貫いた結果幸せな結末に至るのだが、その幸福が保守的な社会体制の基に成り立っていることは否めない。さらに、Mansfield Park や Fanny が象徴する価値観の正当性が証明されるのは、川口能久が指摘するように、「機械仕掛けの神」（川口 131,143）という作者の強引な筆によるものである。Maria と Henry の駆け落ちや Julia と Yates の駆け落ち、Grant 博士の死など、Fanny のハッピー・エンディングには欠かせない出来事には、「無理をしてでもマンスフィールド的価値観の勝利で終わらせようというオースティンの意志が働いているのである」（139）。Fanny は Henry の求婚を拒否することで個人の権利を貫いたが、神業的な出来事がなければ、Fanny は Gregory 博士の教えのとおり、生涯独身のままであっただろう[20]。Austen がこのような強引な結末を描いたのは、女性が個人の権利を主張することが、当時の社会体制において必ずしも幸福に結びつくものではなかったという現実を認識していたためであろう。ゆえに Austen は *MP* において、個人としての女性の権利と保守的な体制の両立というユートピアを描き出したのである。

注

1）たとえば、Trilling 188, Butler 211, Lauber 61。

2）たとえば、Lauber 73-8, Tanner 146-155, Roberts34-37。

3）Wollstonecraft の死の翌年である 1798 年に、夫 Godwin は彼女の伝記 *Memoirs of the Author of A Vindication of the Rights of Woman* を出版したが、そこに彼女の恋愛遍歴が克明に描かれていたことが彼女の評価を低下させた大きな要因だと言われている。

4）*MP* を反保守主義小説とみなす主要な研究者の一人である Claudia L. Johnson も、Austen は *MP* において家父長制の堕落を描くことで保守主義的なイデオロギーに異議を唱えているとする。しかし彼女の論では、Fanny の存在意義に関しては深く追究されておらず、保守主義説を唱える批評家たちによる従来の典型的な Fanny 像を脱するほどの議論は展開されていないといえる。（Johnson 1988）

5）Austen は姪の Anna Austen 宛の手紙で「私は Edgeworth さんの小説とあなたと私の小説以外は好きにならないと決心しました」と述べており（Austen, *Letters* 405）、*Northanger Abbey* の 1 巻 5 章でも *Belinda* を評価している。

6）たとえば *MP*, 36-8, 46-7。

7）“she as well as the brute creation, was created to do his pleasure.” この個所は以下の初版本からの引用である。Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman*. New York: A. J. Matsell. 1833. この個所を除き、この作品からの本稿での引用は、Wollstonecraft によって改定された最後の版である第 2 版に基づく Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman*. 1792. New York: Norton, 2009. の頁数に拠る。Wollstonecraft は、第 2 版ではこの個所を “the whole creation was only created for his convenience or pleasure”（29）に書き換えている。

8）たとえば、Rousseau は性行為における男女の流儀の違いを男女の精神的関係と関連づけ、男性は “active and strong” で、女性は “passive and weak” であるべきという原則のもと、“it follows that woman is made specially to please man…. If woman is made to please and to be subjugated, she ought to make herself agreeable to man instead of arousing him”（Rousseau 358）と結論づける。また、教育者であり、ロマン派の詩人としても有名な Anna Laetitia Barbauld（1743-1825）も、‘To A Lady, with painted Flowers’ と題した有名な詩の一節で、“Your best, your sweetest empire is――to please” と述べており（Barbauld 97）、女性は男性を喜ばすべき存在であるという観念が幅広く受け入れられていたことが分かる。

9）とくに、Wollstonecraft 5 章と 9 章。

10）とくに、Wollstonecraft 4 章と 12 章を参照。

11）18 世紀の代表的なコンダクト・ブックである John Gregory の *A Father's Legacy to His Daughter*（1774）と合本で出版された Hester Chapone の *Letters on the Improvement of the Mind* でも、「音楽と絵画は退屈で時間を持て余した女性には格好のたしなみごと」（Todd xvi-xvii）とされていた。Chapone は Wollstonecraft が評価した数少ない女性著述家の一人である。

12）彼女の言う rakes とは、*Clarissa* の Lovelace のような "Men of wit and fancy" [who] "will inspire passion" in women（Wollstonecraft 127）を指す。

13）"Jane Austen's heroines are not self-conscious feminists, yet they are all exemplary of the first claim of Enlightenment feminism…"（Kirkham 84）。もちろん、当時フェミニズムやフェミニストといった用語はまだ存在していなかった。

14）Wollstonecraft の *Maria, or the Wrongs of Woman*（1798）や Charlotte Brontë の *Jane Eyre* (1847)、Wilkie Collins の *The Woman in White*（1860）に見られるように、女性が男性の経済的利益などの犠牲となって、精神病患者として精神病院などに監禁されることは 18-19 世紀のイギリス文学では珍しくなかった。

15）たとえば、Sarah Pennington の *A Mother's Advice to her Absent Daughters*（1761）は当時反響を呼んだ conduct literature の一つだが、そこにも女性に必要な性質として "sweetness" が挙げられている。また、Austen が *PP*（第 1 巻 14 章）において揶揄している James Fordyce の *Sermons to Young Women* でも、次のような記述がある。"[S]weet docility…in their sex[woman], is so peculiarly pleasing to ours."（Fordyce 129）

16）John Gregory は、女性は恋愛において完全に受け身の立場なので、自分に好意を抱いてくれた男性に対する "gratitude" が女性の側で "attachment" へと変化するのは当然だとし、"gratitude" を "attachment" と感じることのできない女性は一生結婚できる見込みはないと述べている。ここでの Edmund の主張は、Gregory の見解と完全に一致している。

It is a maxim laid down among you, and a very prudent one it is, That love is not to begin on your part, but is entirely to be the conse-quence of our attachment to you…As, therefore, Nature has not given you that unlimited range in your choice which we enjoy, she has wisely and benevolently assigned to you a greater flexibility of taste on this subject…In the course of his acquaintance, he contracts an attachment to you. When you perceive it, <u>it excites your gratitude</u> ; this gratitude rises into a preference, and this preference perhaps at last advances to some degree of attachment…<u>If attachment was not excited in your sex in this manner, there is not one of a million of you that could ever marry with any degree of love.</u>（Gregory 36-7 下線筆者）

17）Austen は *NA*、*PP*、*Emma* でも同様の主張を表明しており、たとえば Emma は、"it is always incomprehensible to a man that a woman should ever refuse an offer of marriage. A man always imagines a woman to be ready for anybody who asks her" と言ってのける。それに対して Knightley は、"Nonsense! a man does not imagine any such thing"（Austen, *Emma* 64）と断固として抗議し、Edmund とは対照的な反応を示す。また、*NA* ではヒロイン Catherine ではなくヒーロー役の Henry にこう言わせている――"man has the advantage of choice, woman only the power of refusal"（Austen, *NA* 74）。

18）*Belinda* 17 章。

19）Austen は 1815 年 12 月 11 日の Reverend James Stanier Clarke への手紙で、MP は "good sense" に関する本だとしている。（Austen, *Letters* 443）

20）注 16 を参照。

引用文献

Austen, Jane. *Emma*. Ed. Richard Cronin and Dorothy McMillan. Cambridge: Cambridge UP, 2005.

————. *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others.* Ed. R. W. Chapman. Oxford: Oxford UP, 1979.

————. *Later Manuscripts.* Ed. Janet Todd and Linda Bree. Cambridge: Cambridge UP, *2008*.

————. *Mansfield Park*. Ed. Claudia L. Johnson. New York: Norton, 1998.

————. *Northanger Abbey*. Ed. Barbara M. Benedict and Deirdre Le Faye. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

————. *Pride and Prejudice*. Ed. Pat Rogers. Cambridge: Cambridge UP, 2006.

Barbauld, Anna Letitia. *Poems 1792*. Oxford: Woodstock Books, 1993.

Boswell, James. *Boswell's journal of a tour to the Hebrides with Samuel Johnson, LL.D., 1773*. Ed. Frederick Pottle and Charles Bennett. Melbourne: Yale UP, 1963.

Butler, Marilyn. "*Mansfield Park*."*Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford: Clarendon Press, 1975.

Chesterfield, Philip Dormer Stanhope. *The Letters of Phillip Dormer Stanhope 4th Earl of Chesterfield*. Ed. BonamyDobrée. Vol. 4. New York: AMS Press, 1932.

Edgeworth, Maria. *Belinda*. London: J. M. Dent, 1993.

Fordyce, James. *Sermons for Young Women 1766*. Female Education in the Age of Enlightenment. 1. London: Pickering, 1996.

Forster, Edward Morgan. *Aspects of the Novel*. Ed. Oliver Stallybrass. Harmondswroth: Penguin, 1990.

Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1984.

Gregory, John. *A Father's Legacy to His Daughters 1774*. Female Education in the Age of Enlightenment. 1. London: Pickering, 1996.

Haselswerdt, Marjorie B. "I'd Rather Be Ratliff: A Maslovian Study of Faulker's*Snopes*." *Third Force Psychology and the Study of Literature*. Ed. Bernard J. Paris. New York: New York UP, 1997.

Johnson, Claudia L. Introduction. *Mansfield Park*. By Jane Austen. New York: Norton, 1998. xi-xxi.

————. "*Mansfield Park*: Confusions of Guilt and Revolutions of Mind." *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. Chicago: U of Chicago P, 1988.

Kirkham, Margaret. *Jane Austen, Feminism and Fiction*. Sussex: Harvester, 1983.

Lauber, John. "*Mansfield Park*."*Jane Austen*. New York: Twayne Publishers, 1993.

More, Hannah. *Memoirs of the Life and Correspondence of Mrs. Hannah More*. Vol. 2. Ed. William Roberts. London: Seeley and Burnside, 1834.

Pennington, Sarah. "An Unfortunate Mother's Advice to her Absent Daughters." *The Young Lady's Pocket Library, or Parental Monitor*. For her own Good: A Series of Conduct Books. Bristol: Thoemmes, 1995.

Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer*. Chicago: The U of Chicago P, 1984.

Roberts, Warren. *Jane Austen and the French Revolution*. London: Athlone Press, 1995.

Rousseau, Jean-Jacques. *Emile or On Education*. Trans. Allan Bloom. Harmondsworth: Penguin, 1991.

Sutherland, John. "Pug: dog or bitch?" *The Literary Detective: 100 Puzzles in Classic Fiction*. Oxford: Oxford UP, 2000.

Tanner, Tony. "The Quiet Thing."*Jane Austen*. Hampshire: Palgrave, 2007.

Todd, Janet. Introduction. Female Education in the Age of Enlightenment. 1. London: Pickering, 1996.

Trilling, Lionel. "*Mansfield Park*." *The Opposing Self*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1955.

Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. New York: A. J. Matsell, 1833.

Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. New York: Norton, 2009.

川口能久「不安定な安定」、『個人と社会の相克―ジェイン・オースティンの小説』南雲堂、2011。

（本学大学院博士後期課程）